敬天愛人

会報 第三十四号

発行日　平成十六年九月十七日
編集人　南洲吟道会広報局
発行人　理事長　吉永洲神
発行所　〒一六五―〇〇三五　東京都中野区白鷺二―三四―五
㈳日本吟道学院南洲吟道会
☎・FAX　〇三（三三三〇）七〇〇九

特集　南洲吟道会創立三十周年記念『吟道感謝の集い』に参加して（順不同）

当日の理事長先生・会長先生

オープニング・花笠音頭

しい踊りと吟で、大会の幕は切って落とされた。松本龍江実行委員長の開会の辞、国歌、西郷南洲翁遺訓「敬天愛人」それぞれを斉唱の後、物故された三十名の方々への黙祷を行う。第三代総裁森豪神先生・総裁小早川桜神先生始め総本部役員、各会代表者のご来光を仰ぎ、錦上華を添えて頂き真に有難い事であった。永年会費を積んで頂いた会員の皆様に、還元することにウエイトを置きパーティーを大事にするため、ステージは、架設舞台であり、若干お粗末の感無きにしも非ずであったが、次々と繰り出される演し物に会場は沸いた。

「西郷南洲翁の心に触れて」のコーナーでは、各伝段位ごとの合吟で、全員詩文を見ない見事な合吟であった。また「最高齢者」コーナーでは、九十一歳の富沢龍富さんが、魅力のある「青春（抄）」を、九十二歳の田代祐龍さんは「胡隠君を尋ぬ」を流暢な吟で、それぞれ披露され我々若者に範を示された。

「本会栄光の記録」のコーナーでは、全国大会吟コンクール七回の金メダル、七回の銀メダル、銅メダル多数の受賞者による合吟が次々に披露された。それぞれメダルを佩用して、さながら綺羅星の如く並び立ちての合吟は、圧巻であった。

コロムビア全国吟詠コンクールで昭和四十年に龍暘会長が、昭和六十年に旭龍がそれぞれ優勝してのご披露吟も素晴らしかった。古賀政雄・丘灯至夫両特別審査員

金メダル受賞者

創立三十周年記念　吟道感謝の会を終えて

吉永洲神

二十年に及ぶ防衛庁陸上幕僚監部武器課勤務を経て、用賀駐屯地の警務隊長として着任したのは、昭和四九年四月であった。私が防衛庁吟詠部を創設し、部長として活躍していたのを知っていた用賀厚生課の事務官の要請に応えて、用賀吟詠部を創設したのは、それから間もなくのことである。詩吟学院（当時）の岳吟教室に籍を置いて研修の傍ら、用賀吟詠部の指導に当たっていた私は、渡辺岳吟（当時）先生に勧められ会を起こすことを決心した。芝浦吟詠部・市ヶ谷吟詠部（何れも私が手掛けた）用賀吟詠部を統合し、そこで産まれたのが本会である。

三十年前の新聞の世論調査に「今日、日本人の最も尊敬する人物は西郷隆盛である」とあった。正に我が意を得たりである。鹿児島では、今も昔も最も尊敬する人物は西郷さんである。薩摩隼人の私が、会名を付けるに何の躊躇もなく頂いたのは、西郷南洲翁の雅号であったのである。会名について後日談があるが、此処では割愛する。

星移り、時は流れてあれからはや三十年、多くの同志が他界したり、転勤したり、退会したり、会員番号だけは空しく七百番を超えているが、多くの同志の去来に想いを馳せ乍ら迎えた三十周年であった。

全国大会合吟コンクールを始め、各種大会に数々の優勝を果たして、栄光の記録を重ねて来た本会同志各位に、改めて感謝の誠を捧げる次第である。

扨、当日は好天に恵まれ「吟と舞と琵琶と歌謡吟詠の競演」と銘打って、めでためでたの若松さまよの「花笠音頭」の華々

のうち、丘灯至夫先生から「母娘二代の優勝は、外に例が無いよ」と賛辞を頂いたことは、記憶に新しい。

現代詩吟詠の「龍虎」は、龍号をお持ちの女子高段者によるものであり、長文・独特の節調・リズムを龍暘会長指揮のもと実に見事に演じた。

「指導者吟詠」コーナーは、本会各会各教場の指導者の吟詠に乗って、本会会員による見事な剣詩舞が披露された。

「歌謡吟詠」コーナーは、総本部発売のテープ等を用いて童謡・民謡・歌謡曲を交えての吟詠であり、聴衆を魅了した。

ラストの薩摩琵琶「鉢の木」は、龍暘（鶴暘）会長・鶴奏・長友暘瑤の皆さんの演奏に乗った有坂静鏡さんの舞は、実に艶やかそのものであった。

西郷南洲翁の心に触れての漢詩吟詠コーナー始め、招待者吟詠・歌謡吟詠・指導者吟詠・薩摩琵琶・剣詩舞、それぞれが適宜織りなしての番組構成は、龍暘会長のアイディアであり、聴衆はきっと満足された事だろうと独り合点している次第である。

理事・実行委員・各係役員の皆様を始め、全会員の皆様に深く感謝申し上げつつ擱筆したいと思いますが、この特集のラストに、数々のご功績をあとに急逝された有坂龍煌さんの葬儀に捧げた弔辞を掲載させて頂き、心からご冥福をお祈りしたいと思う。有坂さん本当に有難う。どうぞ安らかにお眠り下さい。

（理事長）

↑豪華絢爛たる女性吟士
右から六番目・故有坂龍煌さん

三十周年に心より感謝

吉永龍暘

五月二日、緑滴る快晴の好き日に、南洲吟道会創立三十周年記念「吟道感謝の集い」を盛会裡に終了できましたことは、総本部の後援と会員の皆々様の強力な団結のお蔭だと思います。役員の皆様、会員皆様に心より御礼申し上げます。有難うございました。

私は、六歳の時に、いろはで詩吟を書いて下さって教えを頂いたのは、鶯風流宗家鈴木鶯風先生（叔母）でした。初舞台の時に空襲警報発令で中止になり初舞台は成りませんでした。

昭和三十二年二月、詩吟を従姉妹に勧められ、本格的に勉強を始めました。昭和四十年にコロムビア全国吟詠コンクールで日本一を頂けたのは、鈴木鶯風先生のご指導と両親の応援と主人の理解と協力のお蔭でした。その先生の全盛時代の最高傑作「龍虎」は二年間の労作を経て作曲された作品で、芸術祭参加作品として発表されたものです。先生は現在闘病中のため詩吟は出来なくなられましたのが真に残念です。

感動の舞台「龍虎」

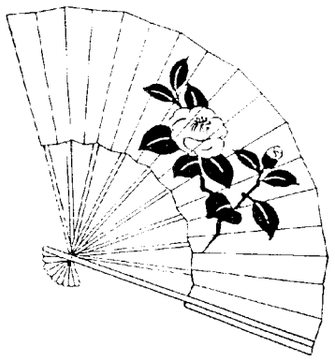
私は、ご指導頂いた作品を発表させて頂き、ご恩返しが出来ればと思い、この度本会三十周年記念の会の演目に加えたのでした。私の詩吟の原点は鈴木鶯風先生でありますので、心より御礼と感謝をこめて龍号を有する本会女子高段者を指導した次第です。

女子高段者の皆様はよくこれに応えて下され、見事な「龍虎」を披露して下さいました。招待の先生から、これは凄い、来年の学院創立二十五周年大会（サンプラザ大ホール）でやって欲しいとの話しもありました。

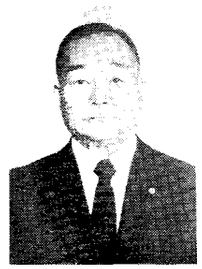
本会は創立三十周年を迎え会員数も増加し、又レベルもアップし、有能な人達に恵まれ、幸せを感じております。

皆々様、健康に気をつけて素晴らしい詩吟を生活に活かし、力を与えてくれる詩吟を身につけて、更に普及して下さいますようご協力をお願い申し上げつ、、心より御礼と感謝を申し上げます。有難うございました。

（会長）



脳梗塞を患って



洲神会第一　橋本　龍清

南洲吟道会の創立三十周年大会を三日後に控えた四月二十九日早朝、頭に軽い鈍痛を覚えた。一瞬〝脳腫瘍のような病気にならなければよいが〟と思う。その後間もなくトイレへ行こうとしたら、左手足が麻痺して動かない。大変なことになった。脳梗塞に違いない。やっとの思いでトイレを済ませ居間の入口で倒れる。章子（家内）は驚いてすぐ一一九番で救急車を呼ぶ。五・六分して救急車が到着し、すぐ担架に乗せられ、市の東北側にある北原病院（脳神経外科）に運ばれる。早速頭部レントゲンをとり病室に至る。

それから毎日点滴と安静の生活に入る。幸い右手足や言語に異常は無く、その日の夕食から寝台上に起き夕食（お粥）を自分で摂ることが出来た。点滴はそれから5月三日まで続けられ、そのお蔭で三日目には左手足の麻痺は次第になくなり、食器も手に持つことが出来るようになり、足踏みのリハビリが出来るまでに回復した。

五月二日は創立三十周年大会の日なので、前日章子に「大会に出席するよう」促す。そして病臥のまま、今日自分が吟ずる予定であった詩歌を口ずさんでみる。合吟の「書懐（後篇）」・「同期の桜」・「富嶽」・「山行同士に示す」・「古城」、そして松本龍江さんとの連吟「近江八景」と一通り流してみる。この分では頭脳は正常のようだ。でも記念すべき大会には参加できない。真に残念の極みである。

点滴は五日間続けられ、その間「気圧療法（約一時間）」も二回行われ、二回目の断層写真では入院当初の毛細血管の詰まりは殆ど無くなっていた。そして点滴をやめた四日からはリハビリが主となり、又水をよく飲むよう指導され二時間おきに水を飲み寝台上でのリハビリを励行する。

七日、担当医師に呼ばれ、十日以降退院してもよいとのお話があり、十一日（入院十三日目）に退院することができた。

その後家では昼間は殆ど寝ることなく歩行の練習を始め、毎日二〜三粁の距離を歩き、又家では体操器具による足踏み運動を続ける毎日である。

入院直後私は今までの健康に対する自信を失い、「これで自分の詩吟人生も終りか。」との極度の自信喪失に陥った。その時章子が「プラス思考でゆきましょう。」と言った言葉に我を取り戻した。そうだ、幸い言葉には障害はなく声も出、コンダクターを弾く右手も健在である。詩吟をやめる必要はないのだ。無理さえしなければ従来どおり詩吟は続けられると思い直した。時恰も五月二十三日の春季全国大会で、私も満八十才の高齢者特別表彰受賞の光栄に浴した。

最後に私の病気に対し、いち早く吉永両先生より暖かいお励ましの言葉と共にお見舞いをいただき、その他会員の皆様から沢山のお見舞いの電話やお手紙・ご来院等をいただいたことを、紙上をお借りして衷心より御礼を申し上げる次第である。

（広報局註…本会副会長・八王子会会長）

創立三十周年記念大会回想

洲神会第二　松本　龍江

思えば長い道程でした。平成十五年五月理事会において実行委員が選出され、記念大会の実行に向けて発進しました。じ後、逐次検討、調整がなされ、平成十五年十月二十五日付をもって『南洲吟道会創立三十周年記念　感謝の集い』の案内が発送されました。その内容は簡単明瞭、平成十六年五月二日、中野サンプラザにて実施、会費は一萬円、十二月二十日までに各会、教場ごとお申し込み下さいとのことでした。

その頃、私にとってはあまり実感は無く、「あ、そうですか。」ぐらいの認識だったと記憶しています。然し、あっと言う間に時は過ぎ、年も押し迫った平成十五年十二月二十日、理事会において大会の細部枠組が理事長・会長より明示されました。まずはプログラムの編成決定、開演中のテーブルは円卓式、一般見学について、総合リハーサルについて、パーティーの演し物について等であり、審議ならびに承認がなされました。

先ずは年末年始が終ってからと悠長に構えたものの演題をよく見てビックリ！この時から不安と焦燥そしてやらなきゃという闘志が渦巻いてきました。今までなら行事の演し物は、せいぜい絶句一題、合吟律詩一題ぐらいでしたが、有るは有るは、まずは国分寺教場として「青の洞門」、洲神会第二「花笠音頭」、各段位の該当は「城山」・「天意を知れ」・「書懐（前篇）（後篇）」、更に指導者吟詠「近江八景」、それだけじゃない。四月十八日は昇段審査がある。初段・皆伝・九段・秀伝のオマケ付、暗記するのは自分の該当するものだけだが、練習は一緒に実施するので、なんと練習時間が短く貴重だったことよ。

この条件は各会・教場皆同じ、やるしかない。必死に練習が開始された。ストレスやノイローゼなんて考える隙は無かった。でも、よくやった。絶対無理だろうと思っていたが、努力すればできるのかなぁ。なにしろ雨の日も、風の日も、そして散歩の時もブツブツと吟じていた。きっと健康の神様も応援してくれたと思う。大会における結果は、個人的には良かろうと悪かろうと、全般的には総て良かったと思う。そして努力した結果は将来、良い思い出となって残ると信じる。吟道万歳。

（広報局註…三十周年記念会実行委員長・本会副会長・国分寺教場指導者）

感じること

龍暘会第一　吉永　旭龍

健康がいかに大切か、人の命が何よりも大切かこの数ヶ月の間に痛切に感じました。

社団法人の中の組織である南洲吟道会の理事長・会長の長女である私がお礼を申しあげるのは変かもしれませんが、でもやはり常に両親が皆様に支えていただいておりますので…三十周年の会を無事に成功させていただき、皆様に深く感謝し厚く御礼申し上げる次第です。

有難うございました。
私の一人娘も七歳を迎え、ようやく健康な子供として育ってまいりました。
一人の吟者である前に母・妻であり、嫁・娘であり、そして吟詠を志すものとして勤めてまいりたいと存じます。
いままで南洲吟道会にご入会いただき出会えた方々、吟を通して出合えた事柄すべてが私の財産と存じております。またもちろん吟界だけでなく、実社会においてもかけがいのない出会いがたくさんありました。
まだまだ中身のうすい吟者でありますが、私が生まれてから感じたことすべてを声に乗せ、また作者の言葉に乗せて表現して参りたいと存じます。
皆様から、もっと若いうちに（早く）始めればよかったッ・・・とか、もう歳だから出来ないョ・・・と耳にすることがあります。
吟に出会えた時・向かい会えた時こそが、その方にとってのふさわしいタイミング＝スタートにちがいないと私は確信しております。
現時点での私も、同じように感じており、ようやく心新たに吟詠を志すものの再スタートに立つことができ嬉しく存じております。
始めたばかりの方もそうでない方も、人との出会いやかかわりは、人にとって大切なことと存じますし、吟を更に学べばそのつど新たな価値観が生ずると存じます。声や身体に衰えはあったにせよ必ずや年月の分、心で感じてきた表現は加えることが出来るはずですから・・・。
とはいえ、私はまだまだ学んでいない詩が多くありますので、コッソリ？努力を重ねる所存でございます。
そして又沢山の思いが募る中、今まで私の人生において多くの指針をいただいた有坂龍煌先生のご冥福をお祈りし、心の中で共に頑張って参りたいと存じます。
今後ともご指導の程何卒宜しくお願い申し上げます。

湖衣姫哀歌の旭龍さん

南洲吟道会創立三十周年記念会の想い

若鷺教場　西本　龍秀

一言で三十年といいますが、良くよく考えてみますと自分もその頃に詩吟を始めたように思います。その時に誕生した人は一人前の大人に成長しています。従って詩吟もそれなりに成長していると思います。五年ごとの記念大会ですが年をかさねるに従い、時の過ぎるのが早く感じるようになりました。これも年齢でしょうか。
過ぎてみれば早く感じ、先を見ればこれから生涯続き先は長いですね。詩吟を始めて三十年余り自分にとっては仕事と詩吟が両立しているように思います。趣味であって趣味ではない。人生そのもの。詩吟を続けていてよかったと思っています。
若鷺教場が開設されたのが昭和五十七年五月、大勢の愛吟者が誕生しています。尺八、剣舞、漢詩の作者と多種多彩であります。美人も勢揃いまた、今年新しく美人が加わり新時代に一歩前進です。
最後に三十周年記念大会で発表されました、山岸志龍さんの漢詩で締め括ります。

賀南洲吟道会創立三十周年　　山岸　志龍

歳華三十此に筵を開き
賓客同門瑞烟に酔う
恩愛の両師に何をもってか報いんや
倫を求めて只管吟辺を研かん

若鷺教場の皆さん

三十周年記念大会を想う

龍暘会第一　　児玉　智龍

五月中旬。あいにくの雨が続く寒い日に広報局から原稿依頼のお手紙を頂きました。三十周年記念大会特集号に掲載するとの事でした。
私は、長年広報局のお手伝いをさせて頂き「敬天愛人」の発刊までの役員の皆様のご苦労は良く存じており、一日も早く投稿しなければと思いペンを執りました。しかし幾度となく机に向かうのですがペンが走らないのです。とうとう締切日まで残すところ一週間となってしまいました。
五月十四日の夜、あまりにも残酷な悲しい吟友有坂龍煌さん御逝去の知らせを受けたからでしょうか…その後未だに心が落ちつかない日々を過ごしております。
五月二日に開催されました『吟道感謝の集い』はズボラで不器用な私にとって二十年間南洲吟道会にて吟道に精進する事が出来た喜びの日でもありました。あいにく今年は新年早々体調を崩し、そして四月には左足の骨折と大会実行委員としての責務を果たせず理事長先生・会長先生はじめとし各役員の皆様には多大な御迷惑をお掛けし深くお詫び申し上げます。
当日は松葉杖での出演となってしまいましたが、進行主任の有坂龍煌さんの配慮でマイクを舞台の下にセットして頂き、早乙女麗洲さんの剣舞伴吟「凱旋」を吟ずる事が出来、この上ない喜びと感謝の気持ちで一杯でした。
三十周年記念大会は「感謝の集い」と言う事で南洲吟道会ならではの細やかな心配りが随所に見られ、とても心地良い

記念大会だったと思います。

詩吟が命でもあった有坂龍煌先生。吟道感謝の集いの日は自信にあふれ輝いておられました。きっと天国でも使い込んでボロボロになった教典と舞扇を手に楽しんでおられることでしょう。優しいご主人に見守られ眠る穏やかな美しいお顔を忘れる事が出来ません。もうお会い出来ないのは分かっているのに…

「ありがとう」…有坂龍煌先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

（広報局註…こだま教場指導者）

「ありがとう」と言える幸せ

龍暘会第一　湊山　冴龍

私こと湊山冴龍、外様（とざま）と言われながらも南洲吟道会に入会させて頂いて足掛け十年。私にとっても節目の年であり、この度の吟道感謝の集いはことのほか感慨深い大会でした。

司会席に着く湊山さん（手前）

「この大会が順調に進行するか否かは司会の責任」と言われる中で、出番の多かった司会者五名は遣り繰りしながらチームワーク良く何とか無事に収まったように思います。

また龍号の皆さんと吟じた「龍虎」は昨年の十一月から練習に入り、あの長い詩文を覚えることからのスタートでした。冬休みの宿題も詩文を覚えること、まだ半年も先のことだから…と思いながら年が明け、先生のコンダクターを頼りに、詩文のプリントには龍と虎の色分けをし、それぞれびっしりと記号が書き込まれて日を重ねるごとにあの独特のリズムに乗れるようになり、龍虎を吟じる楽しさが味わえるようになって参りました。

そして本番、龍暘先生の指揮で、初めて岡田先生の尺八・恩田先生の琴の伴奏を頂いて吟じた龍虎はリハーサルの時よりも緊張の色は見えたものの、練習を重ね、龍号の皆さんの一生懸命が加わって私にとっても忘れられないものとなりました。

会場が中野サンプラザの大広間と言うこともあって明かるく、美しく、皆さんの息遣いまでが伝わってくるような中で、一人一人の南洲吟道会に対する熱い想いが表れて、心のこもった温かさ溢れる大会になりましたことが大きな喜びでございます。

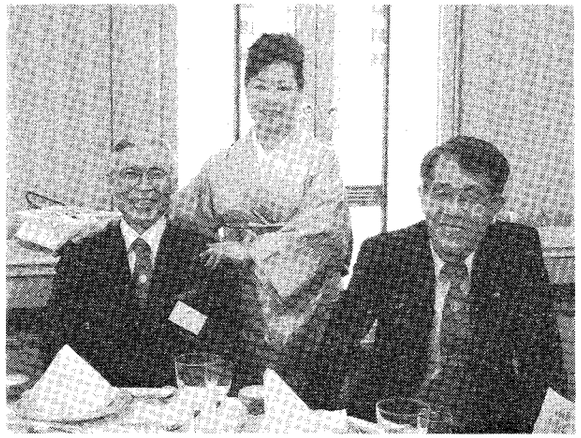
詩吟を通して皆様と出逢えました幸せに、心から「ありがとうございます」と感謝をこめて申し上げます。

（広報局註・指導部長）

立派でしたね。

龍暘会第二　菊田　正龍

詩吟と出会って十六年、過去三回の節目の大会を経験させてもらいました。それぞれ趣が異なり、素晴らしい大会でしたが、今回は又いつもとは違う雰囲気の中の幕開けでした。終った後頂くお写真から当日の様子が華々しく、また、一人ひとり真剣で、老いも若きも一丸となって取り組んでいる様子が生き生きと写し出されております。



パーティーの席でくつろぐ菊田さん（中央）

「故郷」を吟じたあやめ・こだまの面々も例外ではなく、全員そろって練習した事が無いまま当日を迎えました。当日ぶっつけ本番で迎えた心境は、胸中、不安でいっぱいだった事でしょう。なんでも「精一杯声を出して頑張りましょう。」の掛け声と気持ちを一つにしてマイクの前にたった様です。まさかまさか、前奏が無く、いきなりメロディが流れて、私のほうが慌てふためいてあたふた致しましたが、舞台の上はまっすぐ前を向いて、微動だにしない姿がありました。何も教えてはいなかったのに、二番が始まった時に申し合わせた様に全員一番を歌う姿に、私はホッとしたと同時に、立派だったと感心致しました。

あやめ②のお二人は入会して丁度一年、初めての会に黙ってついて来てくれて、全身全霊で取り組んでくれたようです。終ってから気が抜けたとか。

あやめ①の先輩たちは、「自分たちが引っ張っていかなければ」と思い、皆で頑張った気持ちが見事ひとつになったのでしょう。「お疲れ様」と、ねぎらうと同時に「またまた将来が楽しみだわ。」と思っております。

一点の曇りも無く一つに集中する思いがハプニングにも動じない態度となって現れたのでしょうか。人の琴線に触れる吟とは一所懸命の境地から出てくるのかも。弱小教場ですが楽しく、又次ぎに向かって頑張りましょう。

最後に素晴らしい大会を企画された先生はじめ、実行委員の方々、役員の皆様方、有難うございました。

（広報局註　指導局長・あやめ教場指導者）

吟道学習三十年

鷺宮教場　高橋　龍登

一、縁あって南洲吟道会発祥の地用賀駐屯地に所属して、吉永洲神理事長の門下生となって以来早くも三十年がたちました。この間可もなく不可もなく少しずつ吟道に勤しんで参りました。

貢献もしないのに四月十八日に行われた昇段審査において十数段の登竜門を経て最高位の範師の認許証を得ることができたことを心から光栄に思います。

鷺宮教場の皆さん

二、次は鷺宮教場についてですが、こちらも開設以来1/4世紀を経まして益々血気盛んであります。特に発足以来のキャリアウーマン数名の方は蘊蓄も豊富であり全国大会のコンクールにおいて金・銀・銅賞を受賞しております。

私のモットーは絶句・律詩までを一吟三十回反復練習することにより、どんなに忙しくとも一日一〇分三回を唱えることで、十日間で作詞者の心魂を体得して自分のものとし暗唱して流暢に歌唱できるようになれば人を感動させると信じております。

三、次は、創立三十周年記念吟道感謝の集いに向かっての練習について述べます。今回の大課題は何と云っても大作「龍虎」であったと思います。

この長い吟詠を暗唱して合吟することは、至難と思われました。我が鷺宮教場においては、吉永龍暘会長の熱烈で厳格な御指導のもと、一～二月の殆ど毎回この曲の習得に費やしたといっても過言ではありません。助走は長ければ長い程、より高きところに登ることが出来る。

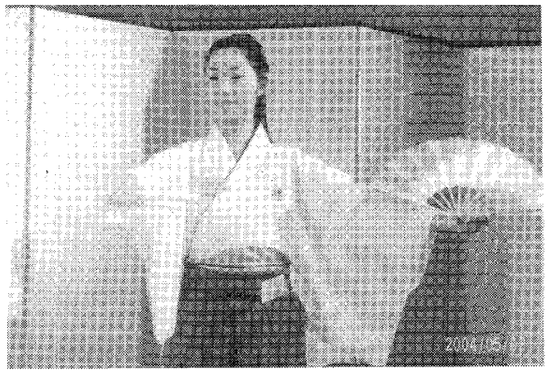
そして、五月二日サンプラザの晴舞台において見事に花開き、大喝采を拍したことは周知のとおりです。なお鷺宮の課題吟「五木の子守唄」、その他の出演者は四月二十五日の総合リハーサルにおいてほぼ掌握し得たことを申し添えて終りたいと思います。

（広報局註　鷺宮教場幹事長・現会員中の最古参です）

いやぁ～ん★すごい!!

白鷺教場　加藤　杏城

何ともふざけた題名ですが、今回の吟道の集いで素直に感じた心の叫びです。盛だくさんの内容の濃い演出に、私のミーハー精神は極限に高まりを見せつつありました。合吟・歌謡吟詠・新作の龍虎・琵琶とどこかの全国大会のような内容。圧巻だったのは金・銀・銅のメダルをつけての合吟。これを聞いていると詩吟も興味の範疇ではなく目的意識を持ち、常に精進していかなくては！という思いが浮かびました。龍虎は今までに聞いたことが無い節やメロディーだったのでとても魅力を感じました。いつか龍虎をやってみたい、と律詩も満足に歌えないのに思ってしまいました。でもそれだけ魅力的なメロディーだったのです。そして龍虎の伴奏のお琴と笛。学生時代にフルートをやっていた私は笛の音色やいろんな笛、尺八に耳がいってしまい、龍虎の世界をさらにドラマチックに仕立て上げていく笛に目がクギッケでした。感動・感激・目がウルル～！雅楽の楽器と一緒に演奏する龍虎も見てみたい、なんて！


富士山を舞う加藤杏城さん

私は教場の歌謡吟詠と日高先生の富士山に詩舞で参加しました。舞台慣れしていない詩舞にドキドキ、総裁他御来賓の席が近くてドキドキでしたが何とか努めることがができました（カナ？）母の明龍は私の詩舞をあまり見たことが無いのですが「よかったよ。」と言って貰えてちょっとジーンとしてしまいました。※感動するほどうまく踊れていないのですが。本人はよかったつもり？。図々しくも!!

その後のパーティーでは母とはしゃぎまくってしまいましたが、何もかも、全てが心に残る吟道の集いでした。

薩摩揚げも絶品でした。

南洲吟道会三十周年によせて

座間会　川瀬　慧龍

風薫る五月南洲吟道会三十周年記念の会が開催されました。三十年と一口で云っても理事長・会長両先生始め役員の方々の一方ならぬご苦労、大変なことであったと存じます。本当におめでとうございます。有難うございました。

私も入会二十余年、月日の立つのは本当に早いものです。皆さんのすばらしい吟に聞き惚れました。過ぎし日々をふり返って、これでよかったのか、と反省させられました。吟は大好きでしたが、あまりの上達の遅さに嫌になることも多々ありました。吟道の奥深さに、私に合っているのかと年を重ねる毎に詩文の覚えも悪くなるし、練習不足を感じます。

中野サンプラザの大広間で吟じる皆さんのすばらしい吟にうっとりしました。皆で心を一つにして吟じた「竜虎」よかった。自分ながら惚れ惚れしました。参加して本当によかった。これからも挑戦することだと、先輩を見習って、足腰と声の続く限り挑戦して行きたいと又、改めて思いました。

本当にありがとうございました。
書面にてお礼申し上げます。

（広報局註　座間会幹事）

三十周年記念大会について

座間会宮本教場　田山　雄祥

和気藹々のうち南洲吟道会創立三十周年記念の吟道感謝の集いが出来ましたことを大変嬉しく思いました。

開催に当り、理事長・会長初め関係役員の皆様の御苦労は大変であった事と存じ深く感謝申し上げます。大成功に出来ましたこと本当に有難う御座いました。

会場は立派な結婚式の様子で誰もが吃驚仰天の気持ちになりました。緊張の中オープニングの花笠音頭で幕を開け、なごやかな雰囲気にし気持ちをほぐして下さいました。企画はすばらしく重ねて御礼申し上げます。

先ず私の出場する「書懐（前篇）」は長文で内容を理解するまで何回となく練習し、学び覚えた経験は格別の思いでした。今後の吟道の進む道しるべといたしたいと思っております。

南洲吟道会の方達全員が立派に内容を理解し覚え暗記するまで練習をし、遂行できたことは他の会に誇れるものがあります。

特に長文詩「龍虎」は会長の指導よろしく見事に演じ素晴らしいものでありました。お稽古の賜物であります。舞台と観客が一体となり、会場が一瞬静まり返り聞き惚れてしまいました。

また女性群の綺麗なこと、和服姿は日本伝統の象徴と申しますが美しい限りであり、男性群を堪能させてくれました。

又打ち上げも盛大に全員が一体となり盛り上げ、楽しい三十周年の反省と喜びをお互いに噛みしめました。思い出話も尽きません。南洲吟道会の発展の成果であり全員の誇れる一ページが出来たと思います。

なごやかに　感謝の集い　楽しけれ
時を忘れて　明日を育む

（広報局註　宮本教場幹事長）

祥号の方々・書懐（前篇）

南洲吟道会三十周年記念の会を終えて

若草教場　篠　房城

左側　大塚優城さん・右側　篠房城さん

「三十周年まで未だ一年もあるわ」と思った昨年でしたが、あっという間に時間は経ち、二回のリハーサルも終え、いよいよ本番の五月二日。和服に身を包み、晴れがましい様な嬉しい気持ちで足取りも軽く会場に行きました。エレベーターを降りた瞬間から華やいだ弥が上にも三十周年の記念すべき行事の喜びと重みを感じさせてくれました。

オープニングの花笠音頭に始まり第一部よりトントンと進みました。

吟歴も浅く、一生懸命勉強してこなかった私などは感動することしきりで、息をすることさえも苦しい位に聞き入っておりました。

第十一部現代詩コーナーでは大野恵造先生作詞、鈴木鶯風先生作曲になる「龍虎」。吉永龍暘先生の指揮のもと、一筋の乱れも無き吟。さすがに「龍」のつく諸先輩方。丁丁発止のやり取り素晴らしく感動の極みでした。いつの日か私達も歌わせていただける日がくるでしょうか。

招待者吟詠、吟士権者コーナーも素晴らしく、本当に三十周年記念大会に相応しい出来栄えだと思いました。

祝宴も本当に和やかに温かい会で、特に有坂先生が記念大会、祝宴共に終始楽しそうに走り回って会を盛り上げていらしたことが目に焼き付いて居ります。あれから十二日後の五月十四日に有坂先生が急逝され、若草教場の私達は親に先立たれた子供の如く悲しみ、うろたえました。つい先頃、有坂先生の御意志に鑑み、洲神先生、龍暘先生の御助力を戴き、心を奮い立たせ勉強していくことを誓い合いました。

最後になりましたが、此の会のために御尽力くださいました吉永洲神・龍暘両先生始め諸先生、又役員の方々、本当に有難う御座居ました。心から御礼申し上げます。

在りし日の有坂龍煌さん

今日学ばずして…

山内教場　佐藤　千水

お孫さんを膝に……佐藤さん

木々の緑のグラデーションが日毎に美しくなり穏やかな晴天に恵まれ、三十周年記念の会に相応しい何と素晴らしい佳き日であったことでしょうか。

吉永洲神、龍暘両先生、三十周年記念おめでとうございます。創立以来三十年の長きに亙り、当会の発展のために粉骨砕身の努力をされ今日を迎えられましたこと、心より敬意を表しお祝い申し上げます。

感謝の集い、吟詠コーナーで一番の私たちは楽屋に集合し、隣人が不在、帯を締めていない、トイレ等々のハプニングを、有坂先生の機敏な気配りと緊張を解す冗談でクリアし和やかな雰囲気の中、優しくソフトなナレーションの誘導で舞台へ。「偶感」を二十名で合吟、無事終り「良かった」と言われホッ！と安堵いたしました。

さて、午後一番は、我が山内教場の「旅愁」。山内先生が体調不良で欠席されたので、私たちはしっかり頑張ろうと誓い合いました。吟じ出しは中村さんと天野さん、「指を数えて想う」の「想う」は清水さんの個性のある声を生かして他の人はトーンを落とす。先生の「城」の三人を引き立てる思いやりの演出です。吟じ終わって諸先生方から励ましや賛辞のお言葉を頂き、会員一同大変嬉しく感激いたしました。

「謂うなかれ今日学ばずして…」の詩の如く各教場の皆様方も日々研鑽を積まれ、今日有終の美を飾られたことと思います。特に「龍虎」は圧巻でした。私は「勧学の文」の詩文に接し、日頃怠慢な自分を恥じ、肝に銘じ、緩んだ気持ちに活を入れなければと痛感いたしました。

又、感謝の集い、祝宴で隣席になった方達と親しく歓談し、交流を深め有意義な一日を過ごせたことを幸せに思います。今後南洲吟道会が明日に向け大きく飛躍されます様祈念申し上げます。

感　謝

いずみ会　平松　玉祥

入会十一年、私事ながら此の間、孫も八人になり教場も開設、三年前の主人の大病と相次ぐ兄二人の他界…。種々有りました。その三倍の年月を経た南洲吟道会、平坦な道ばかりでは無かったのではと、三十年間も存続なさった洲神先生、龍暘先生、先輩方に心より感謝し、会員で有る幸をしみじみと感じております。

三十周年記念の会に向け、昨年よりの準備に身の引き締まる思いでスタートしましたが、プログラムが出来るにつれ焦りを感じる様になりました。詩吟に嵌った私は毎日でも詩吟がしたく、いずみ会、洲神会、若鷺教場の三ヶ所でご指導頂いているからです。

各会教場、雅号、指導者、合吟コンクール（金・銀・銅）の各部での合吟が決定され、詩文の暗記、吟じ込みに日夜頭を悩ます羽目になってしまいました。指導者の部では若草教場（今は亡き有坂龍煌先生の教場）代範青木泰祥さんとの合吟、大会間近に教場にお邪魔し有坂先生の御指導を受けました（当時のテープを聞く度に涙が出ます）。本番では二人共力が出せず落ち込みましたが、心に残る出来事でした。

前日からの準備も整い、当日は緊張と心の高ぶりを押さえながらの一日でしたが、心地良い疲れと共にまず先ず無事終了。来賓の先生方からのお褒めの言葉の中で、「会員一人一人のお顔が輝いて見え、本当に素晴らしかったです」といわれ、夫々の立場で皆が精一杯努力した結果ではないかと嬉しく思いました。後何年詩吟が出来るか判りませんが、生有る限り頑張る所存です。

（広報局註　企画部次長・同会平松教場指導者）

いいかげんな生き方の私

習志野教場第一　畔柳　弘城

私の父親は、貿易会社に務めるサラリーマンで、しばしば勤務地が変わり、おかげで私は小学校を五度変わった。

小学校に入学した。新川尋常高等小学校と呼ばれ、母親に手を取られ、入学式と大きく墨書されたアーチ型の看板を背にした写真が今もある。

五年生の時だったと思うが、大東亜戦争（太平洋戦争）が始まった。この頃のことである、尋常高等小学校が国民学校にかわり正門の大きな木札の文字も変わった。

翌年、これまた父の転勤で旧関東州大連に移住した。六年生の夏休みの転校は、時期的に中学校（旧制）入学に支障が出ないかと子供なりに不安もあったが、どうにか大連第二中学校に入学することが出来た。二年生まではごく普通の中学生の生活であったが、三年生に進級すると同時に学徒動員と称して軍事工場で工員として働くことになる。

やがて終戦、引揚げと外地居住者のおさだまりの経緯をたどり、父親の生家の岡崎に定住することとなる。地元の岡崎中学校に転入が許された。翌年、六三三制と学校制度が変わり、岡崎高等学校と校名が変わった。この時、特例のような制度があった。旧制の中学で卒業するもよし、新制高校の三年生に移行してもよい、と言った訳の分かったようなわからないような制度であり、私は前者を選んで旧制中学卒業予定の資格で大学に進んだ。

こうした幼少年時代の体験が、現在のいい加減な私を育てたと思っている。近ごろ程ではないにしても、当時も〝いじめ〟といったものはあった。概ね転校生がこの対象となりがちであった。幸いにも私は、記憶に残るほどの〝いじめ〟の洗礼も受けず行く先々の学校にすんなりと溶けこめた。

こんな私の手元には、一枚の卒業証書もない。勿論外地からの引き揚げといった、看つた看つままの脱出ということもあったが、通った学校に対する愛着心が希薄だった。共産革命の現実もこの目で見た。社会に対しての信頼感が持てなかった。どんなに頑張ったところで所詮、現在の社会体制がいつまでも続くはずはない。歪んだ人生だったと70歳を超えた私は、反省している。

さて、詩吟を習い出して十年近くなる。一つことをこんなに長く行ったことがない。昇段審査の度に頂く認許状が随分の枚数になった。遊び半分で始めた吟歴もいつしかこんなになった。感慨深いものがある。何が私をそうさせたのか。

私は漢詩が好きである。詩文を目で追い、読むだけで感動する。低音で、語るように吟じられる広瀬先生の吟には涙を禁じえない。加えて、教場で学ぶ先輩諸兄姉の真摯な態度。これだ!!と気が付いたころ、突然体調を崩した。

いい加減な生き方をしてきた私も、これには参った。医師の指示には素直に従った。吟友が本気で心配してくれた。

今は、ごく普通に暮らしている。完治したかどうか、病名は何かも医師には尋ねなかった。やっぱりいい加減人生は続いている。最後の検査のとき、「まだ五年は大丈夫ですね」尋ねる私に、日ごろぶっきらぼうな医師は大きく頭を上下させ笑い顔を見せた。また、初心にかえって吟を習おう、昨今の私である。

吟に思う

習志野教場第二　成田　郎水

吟をはじめて、早や四年になります。号は〝水〟を頂戴しておりますが、自分なりに反省してみると、吟仲間と比べて見ると自分なりに納得のいく吟は出来ていないことに気付き、反省しきりである。これを機会に練習に精進し、先生である広瀬正龍先生の恩に報いるためにも頑張って練習して行きたいと思う。何回も指摘指導されている発声、発音、息継ぎ、タイミング、強弱を繰り返し思い返し一つでも上の号に早くゆく様にと、同時に自分の号に恥じない吟になりたい。丁度この頃、南洲吟道会の創立三十周年記念大会が五月二日に中野プラザで開催され、参加させてもらいました。

各教場の発表を聴かせて戴いた。プログラムに従って進行していったが、独吟あり、合吟あり、踊りや剣舞もあり多芸者集団の発表会であった。

発表会で、心に残った印象は、全員和気藹々気取りなく伸び伸びと発表され、心から楽しんでおられたのがよかった。湖衣姫哀歌を吟じた、吉永典子さんの吟は特に心に残った。最後に、役員の皆さんありがとう。

（広報局註　同教場幹事長）

三十周年を迎えて

船橋湊教場　小泉　則城

「あなたの趣味は」、「詩吟です」と自己紹介で胸を張って答えられるようにと、詩吟の稽古に励み、早いもので九年になろうとしています。そんな中、本会は三十周年を迎え、大変喜ばしいことと思っています。

昨年十二月の教室で、齋藤先生から記念大会の出吟が確定したとの知らせを受け、春季昇段審査会の課題吟と併せ、会員一同「こりゃ大変なことになって来たゾ」と口々に言い合ったことを憶えています。本格的な練習は年明けの一月から始め、公民館がとれない時は、カラオケボックスを練習会場にしたことも何度かありました。

そして五月二日の本番、中野サンプラザにおいて三十周年記念大会が開催され、シャンデリアの会場は、総裁をはじめ来賓及び会員の皆様の詩吟を愛する人々の熱気に包まれていました。

プログラムも進み、我が教場の出番となり、先生の指導通りに吟じることができるか不安がぎる。出番前に先生から「テープの速度が遅いので注意」の忠告を頭に入れステージへ向かう。何度も繰り返し練習を重ねてきた「礼」、「左足から一歩前」、「マイクの高さを調整しマイクに近づく」。前奏の後、五人一斉に「松島ノーサーヨー」と歌い始め、会場からの温かい手拍子に緊張の糸は大分ほぐれてきた。

今回参加の五人の息を合わすこと、一人ひとり臆することなく腹からの声を出すことを念頭に、民謡から吟に移り、原田真城先輩の先導「風は高し松島―」の後、五人一斉の合吟となり、「大漁だェー」まであっという間の舞台でした。「左足から一歩下がり」、「礼」で退場し、先生から「大変良く出来ました」との言葉を頂き、一つのことを皆でやり終えた達成感で、肩の力がスーッと抜けていくような何ともいえない心地良い気分を味わうことができました。

普段の生活の中では味わうことのできない緊張と達成感で、「詩吟をやっていてよかったなァ」と思える時でした。詩吟を始める動機や目的は、会員それぞれ違うかも知れませんが、一つの事を皆で協調し合い一生懸命やり遂げる事で各自の自信にも繋がり、これからの生き生きとした人生の助けとなることを確信しています。

また、我が教場において今回の吟題「大漁吟じ込み」で、教場会員同志の繋がりを一層より強固なものにしたことに感謝！それに大会運営を支えて頂いた皆様に感謝！感謝！

弔辞

社団法人日本吟道学院南洲吟道会理事・事業局長有坂龍煌先生の御霊に、南洲吟道会を代表して、謹んでお別れの言葉を捧げます。

有坂龍煌先生の突然の、全く突然の悲報、私達は遽かには信じられませんでした。あんなに元気でテキパキと事を処しておられた先生のこと。何か間違いではないかと。いや間違いであって欲しい。会員一同冀うことしきりでありました。しかし、私達の願いは、無惨にも打破られた現実のものとなってしまいました。ショック!!ああ何たる事ぞ。会員一同のみならず悲報を聞いた総本部の人達も、一瞬物凄いショックでした。でも未だにあのお元気な姿が、どこからか突然現れるのではないかと思えてなりません。街の灯が消えたようです。南洲吟道会の灯も消えたようです。正に、惜しみても余りある方でした。「人生って悲しいものですね」のあの歌がわが胸をよぎるのでした。

思えば、二十一年の永きに亘り会の行事に率先垂範参加されました。殊に理事・事業局長になられてからは、会の運営、事業に積極的に関与され会の発展に大きく貢献されました。吟に踊りに、多くのステージを踏まれ優勝・準優勝を獲得されました。

今年の年賀状に、次のように記されていました。「旧年中は、色々とご指導頂き有難うございました。創立三十周年記念の大会を、大成功にするために私の出来る限りの力を出したいと思います。どうぞご指導頂きたく思います。詩吟には自信のない私です。」この決意の示す如く、実行委員として大会の会場採りから、演技の小物借り、お菓子の買い出しに至るまで精を出して下さいました。そして迎えた五月二日本番。吟に舞に出ずっぱり、パーティーに入っても美しい衣装と艶やかな舞を実に楽しそうにご披露下され見事に盛上げて下さいました。こんなご活躍が頂けたのも、ご主人様始めご家族の皆様の暖かいご理解があったればこそであります。

大会の翌日、小道具を取りに見えた有坂先生は、前日の疲れも見せず、にこやかに「先生疲れたでしょうから、これで疲れを癒して下さい」と一箱のチョコレートを下さいました。神棚に供えてありますが、こうなった今、やたら食べられず大事に保管しています。そうです。事ほどさように、思いやりの心深い方でした。南洲吟道会のモットーである西郷南洲翁の遺訓「敬天愛人」つまり「天を敬い大自然に遵い我を愛する心を以て人を愛する」という「思いやりの精神」に溢れた人でした。殊に、後輩に対して暖かく接して下さいました。敬天愛人の実践者でした。思い出しては泣き、泣いては記すこの弔辞であります。

永年の吟道に対するご功績により、社団法人日本吟道学院総裁から「宗師」として顕彰され、五月十四日付で叙位されました事をご報告致します。本会の大きな柱を失った私達は、この大きな悲しみを乗越えて有坂先生のご意志を受け継いで更に吟道に励んで参ります事を誓います。

吟道のみならず、野方消防団六分団班長として、地域社会に目覚ましい活躍をされ、東京消防庁から消防総監表彰を、東京消防協会から協会長表彰を受けられた有坂範子様、あなたのその名は永くこの地域に留まることでしょう。

ご主人様始めご遺族の皆様は、お寂しいことでしょう。残されたご家族の事が、さぞ心残りだと思いますが、周りにはお世話になった南洲吟道会の多数の会員がついていますのでどうぞご安心下さい。

茲に万感の思いを込めて、最後の「お別れ」を申し上げます。

さようなら　さようなら

平成十六年五月十九日

在りし日のお姿を忍びつつ

社団法人　日本吟道学院副総裁
南洲吟道会理事長　吉永洲神

本部だより

☆ **新教場誕生・おめでとうございます。**

六月一日付、習志野会小林教場が誕生しました。指導者は、小林健祥さんです。会員一同弥栄をお祈りします。

☆ **新入会員ご紹介**

次の方々が入会（再入会）されました。お帰りなさい。どうぞよろしく!!

飯田　和子（習志野会小林教場）会員No.七〇一（16・6・1付）
中里　須磨（習志野会小林教場）会員No.七〇二（16・6・1付）
住所・☎・いずれも名簿どおりです。
矢作正太郎（国分寺）　会員No.七〇三（16・6・4付）
〒一八五－〇〇一一　国分寺市本多三－一一－二〇
☎〇四二－三二一－一五四〇
東　晃（国分寺）　会員No.七〇四（16・6・11付）
〒一八五－〇〇三二　国分寺市日吉町三－19－17
☎〇四二－五七五－九一一四

☆ **次の方が16年度正会員に加入されました。**

ご協力有難うございます。

一、阿久根悠水（洲神会①）

☆ **電話番号変更**

三菱自動車吟道部
手嶋　博城　☎〇四五－九八六－二八二六

編集後記

平成十六年五月二日、大成功裡に本会創立三十周年記念行事を開催できました。この感動を会報特集号として記録にとどめるため、皆さんから原稿を募ってはどうか、という声が当日パーティーの席で聞こえてまいりました。

その後の役員会で、会報34号を特集号として発行することに決まり、本号の発行となりました。

理事長・会長両先生の益々ご健勝と、本会の発展を心から願っております。

広報局長